

朝倉古墳測量調査報告書

2005年3月

高知大学人文学部考古学研究室

朝倉古墳測量調査報告書

2005年3月

高知大学人文学部考古学研究室

例 言

- 1 本書は高知市朝倉字宮の奥小字三月田に所在する朝倉古墳の測量調査報告である。
- 2 本調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となり、調査を実施した。調査は、清家章（人文学部助教授）が担当した。
- 3 本調査は福武学术文化振興財団の研究助成を受けて実施した。
- 4 調査期間は2004年8月5日から8月15日である。
- 5 写真の撮影は清家が主として担当した。
- 6 図版2-1・2の写真は高知県教育委員会文化財課よりご提供いただいた。
- 7 掃囲のうち、図1～3の方位は真北を示し、図6～9の方位は磁北である。標高は海拔を示す。
- 8 調査には高知大学人文学部考古学ゼミ生、同1年生・2年生と大阪大学院生が参加した。参加者は以下のとおりである。三好玄（大阪大学大学院生）・上田祥子・徳丸将・桥家豊・赤畠資佳・河越愛・公文寿美世・齊賀智子・新屋順子・竹内暁子・仲野健一・林君平・藤本堯・松木めぐみ・屋敷憲之・中井紀子・緒方成美・岡本治代・佐伯麗（以上、高知大学学生）。
- 9 石室の石材に関しては、吉村康隆氏（理学部）に鑑定をお願いした。図版7の写真も吉村氏による。
- 10 調査の実施にあたり、朝倉神社・泉清博調査士事務所・大阪大学考古学研究室・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・高知市教育委員会・土地家屋調査士協会ならびに長尾由和氏と地元自治会より多大な御協力をいただいた。
- 11 本書の執筆は、清家・仲野・桥家が担当した。分担は文末に示した。石材の観察結果を吉村氏からご寄稿いただいた。
- 12 本書の編集は清家が担当した。

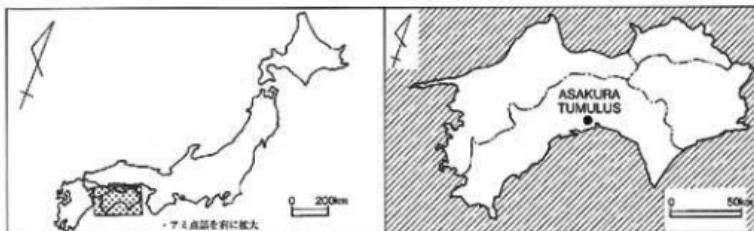


図1 朝倉古墳の位置

目 次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 周辺の遺跡	1
2 調査の契機	3
3 謹辞	4
第Ⅱ章 調査成果	5
1 墳丘測量の成果	5
2 石室実測の成果	7
3 石室に使用されている岩石	8
第Ⅲ章 まとめ	14

図版目次

図版	図版
1 1 朝倉古墳の立地	6 1 横穴式石室玄門（談道から）
2 朝倉古墳遠景	2 谈道右側壁 3 谈道左側壁
2 1 1971年当時の朝倉古墳	4 玄室左側壁 5 玄室右側壁
2 開発前の朝倉古墳	7 1 右側壁奥に見られる砂岩
3 1 横穴式石室入口1	2 右側壁面上部中央に見られる泥質優性
2 横穴式石室入口2	砂泥互層
4 1 天井石露出状況1（北から）	3 平滑な石材に見られる凸状の構造と風
2 天井石露出状況2（西から）	化面1
5 1 横穴式石室奥壁	4 平滑な石材に見られる凸状の構造と風
2 横穴式石室玄門（玄室から）	化面2
	5 平滑な面を持つ石材に見られる風化面

挿図目次

図1 朝倉古墳の位置（赤畠製図）	図
図2 朝倉古墳の立地（桥家製図）	1
図3 周辺の主な古墳（齊賀製図）	2
図4 調査中の1コマ	3
図5 作業風景	3
図6 墳丘周辺の地形（河越製図）	5
図7 墳丘測量図（河越製図）	6
図8 横穴式石室実測図（林製図）	9~10
図9 石室使用石材（清家製図）	11
図10 西南日本の地帯構造区分（原ほか1991より）	12

第Ⅰ章 調査経過

1 周辺の遺跡

朝倉古墳は、高知市朝倉字宮の奥に所在する。高知市は高知県の中部に位置し、なかでも朝倉は高知市の西部にあたり、いわゆる高知平野全体においても西端に位置する。

朝倉古墳は、高知市西部の北に広がる山々の一つ、赤鬼山の中腹から東向きに派生する尾根上にある。東は鏡川流域の平野部を見渡すことができる。南には中世の朝倉城跡が築かれた城山が間近に迫っており、城山と古墳の存する赤鬼山の間にある畠内坂を抜ければ伊野・枝川方面へと至る。つまり、当古墳は、高知平野の中心部から吾川方面及び高知県西部に向かう上で交通上の要所にある（図2）。

土佐には、いわゆる古墳時代前半期に属する古墳はきわめて少ない。また、確実な前方後円墳が確認されていないなど、西日本ではきわめて特異な地域である。前半期に遡る可能性のある古墳としては、幡多地域にある宿毛市高岡古墳群と宿毛市曾我山古墳、高知平野では南国市长歟2号墳と南国市狹間古墳などが挙げられるにすぎない。したがって、土佐では横穴式石室を内包する後期古墳が主として展開している。

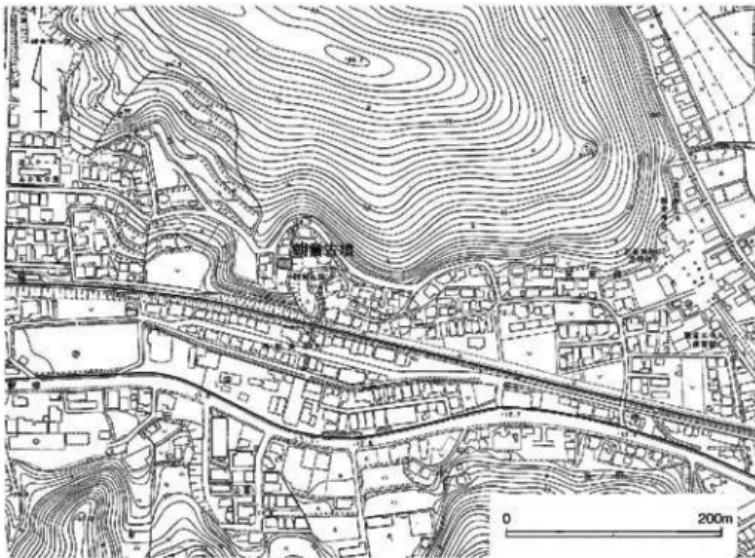


図2 朝倉古墳の立地

2 周辺の遺跡

東西に広い高知平野において、後期古墳が数多く展開するのは南国市を中心とする東部地域である（図3）。高知平野において最も古い横穴式石室を有する古墳も南国市にあり、長歟4号墳と呼ばれる。堅穴系横口式石室であるが、九州等で見られるようなものではなく特異な形態を有する。出土した須恵器もTK10併行期に相当することから長歟4号墳の堅穴系横口式石室は当地域における横穴系埋葬施設の初現であると考えられる。これに続くと目されるのが南国市蒲原山東1号墳や高知市高間原1号墳などである。蒲原山東1号墳は長歟古墳群にも位置的に近く、長歟古墳群の系譜をひくものと思われる。一方、高間原古墳群は、現在の高知市と南国市の境界付近という位置にあることや、石室が小型であること、また、玄門立柱が羨道の内側にせり出すという形態的な特徴などから、蒲原山東1号墳などとは別の系譜上にあると思われる。

この後、TK43併行期からTK209併行期にかけて高知平野の北東に面した丘陵上に盛んに横穴式石室墳が築造される。南国市小堀路古墳や、土佐三大古墳の一つである南国市小蓮古墳、高知県最大規模の古墳群である南国市船岡古墳群などである。同時に高知市秦泉寺古墳群やいの町枝川古墳群などのようにこれまで古墳が築造されていなかった高知平野西半まで横穴式石



1. 翻倉古墳
2. 枝川古墳群
3. 勝平山古墳
4. 行宮森古墳
5. ウグルス山古墳
6. 塚ノ原1号墳
7. 墓ノ原2号墳
8. 福井古墳
9. 宇津野2号墳
10. 宇津野1号墳
11. 秦泉寺新屋敷古墳
12. 吉弘古墳
13. 秦泉寺仁井田神社裏古墳
14. 一宮2号墳
15. 一宮1号墳
16. 蒲原山古墳
17. 布師田1・2号墳
18. 長歟古墳
19. 長歟2・3号墳
20. 蒲原山東1・2号墳
21. 高間原古墳群
22. 宮ノ谷古墳
23. 明見彦山1・2・3号墳
24. 小蓮古墳
25. 舟岡古墳群

図3 周辺の主な古墳

室が見られるようになる。

7世紀代にも船岡古墳群や高間原古墳群の築造は続いている。朝倉古墳は7世紀に築造された大型石室を有する古墳である。これまで見てきたように、高知平野の古墳は多くがその北東部の丘陵上に集中し、現在の区分でいうならば南国市から土佐山田町にかけて、古墳築造の中心があったということができる。そのような中で朝倉古墳は中心から西に離れた地区にある点で特徴的である。石室も他の古墳に比べ、玄門立柱石が顕著に内側にせり出すなど大きな違いをみせる。また、高知平野から吾川・高知県西部に向かう交通の要所にあることもあわせ、南国市から土佐山田町にある古墳との関係が問われるところである。
(桥家)

2 調査の契機

過去の調査 朝倉古墳はこれまでにも数度にわたる調査が行われている。朝倉古墳に関する文献からそれらの調査を順に並べてみると以下のようになる。

明治初年 石室の調査。甲冑・馬具・鉄鎌・須恵器が出土（安岡1953）。

1930年 青年団による調査。標注・説明板の設置。墳丘測量（岡本1989）。

1935年 安岡源一による石室調査。鉄鎌1本と須恵器破片多数出土（安岡1953）。

墳丘の調査は、1930年11月4日付けの高知新聞によれば、青年団によって測量が行われたとされる（岡本1989）が、その図面は現在に伝わっていない。1930年代までは墳丘盛土も遺存していたようであるが、その後の開墾で盛土は流出し、天井石が露出するようになったようである。その後、1970年以降、石室周辺に住宅開発の波が及んだ。この結果、石室に通じる通路と石室だけを残して、石室を取り巻くように擁壁が建設された。そのため、墳丘の旧状を知る術はほとんど失われてしまった。

石室は、明治と1935年の少なくとも2回の調査が行われたようである。しかし、出土遺物は現存しておらず、図面も残されていない。石室の実測図も廣田典夫による略測図（廣田1991: p.285）が、公開されている唯一のものである。墳丘・石室とともに朝倉古墳の内容はほとんど



図4 調査中の1コマ



図5 作業風景

4 調査の契機

明らかになってはいないといえるだろう。

調査の契機 以上のように、朝倉古墳は土佐三大古墳の一つに数えられ、高知県指定文化財でありながら古墳の基礎的資料は作成されずに来た。さらに墳丘周囲まで住宅開発が及び、漢道左側壁がやや内側に傾いている状況であったので、今後の保存処置ならびに活用の計画を考えるためにも基礎的資料を作成することは高知県の考古学ならびに文化財保護にとって重要であると考えられた。もちろん、高知県屈指の後期古墳であるから、墳丘測量図と石室実測図の作成は高知県の古墳時代を理解する上できわめて重要な作業である。以上の理由から本古墳の調査を企画したところ、福武学术文化振興財团より研究助成を得ることができ、調査が実施されたのである。

(清家)

3 謝 辞

本調査を遂行するに当たり、高知市教育委員会には古墳の調査を快諾していただいただけではなく、作業の円滑化に関してさまざまな援助を賜った。高知県教育委員会の森田尚宏氏には、調査前から適切な助言をいただいた。このほかにも朝倉神社・泉清博調査士事務所・大阪大学考古学研究室・高知県教育委員会・高知県文化財団埋蔵文化財センター・土地家屋調査士協会ならびに長尾由和氏・地元自治会をはじめ多くの方々から多大な援助を得た。記して感謝の意を表したい。

(清家)

参考文献

岡本健児編 1989「高知」日本の古代遺跡第39巻 保育社、東京

廣田典夫 1991「土佐の須恵器」四国考古学叢書2、高知

安岡源一 1953「史跡朝倉古墳」「文化財調査報告書」第5集 高知県教育委員会、高知 : pp.13-16

第Ⅱ章 調査成果

1 墳丘測量の成果

朝倉古墳は、高知市朝倉内に所在する赤鬼山から、南へのびる尾根の東斜面上にあり、横穴式石室が東向きに開口している。また、尾根の付け根や先端ではなく中程であり、尾根の鞍部に近いところに位置している。

石室の北・南・西側は住宅開発により、石室に通じるわずかな通路を除いて擁壁に囲まれており、墳丘の大部分は擁壁下にあると考えて差し支えない。さらに、すべての天井石が露出していることから、相当量の墳丘盛土の流出があったと考えられる。そのため、墳丘の規模、形態を問う余地は少ないが、残されたわずかな部分から推察していく（図6・7）。

石室の東側は崖になっており、下には空き地が広がっている。古墳は尾根の東斜面に存在するので、古墳東側はもともと傾斜面になっていたことは確かであろうが、現在見られる崖が墳丘築造当時の様相を伝えるものなのか、造成によるものなのかは判断できない。

石室の西側は、住宅開発により一切が消失し原形を留めていない。1971年当時の写真を見れば（図版2-1）、天井石の露出が現在と比較すると少なかったこと、墳頂付近が比較的平坦であったこと、尾根の鞍部に近いところに古墳が築造されていたことの3点が判明するが、墳形や石室西側の構造を知る手がかりは少ない。

石室の北側は、通路に残るわずかな傾斜に着目すると、傾斜が石室から道路方向へ、南から北に緩やかに降下し、標高24.750m付近を境に再び上昇している点が確認できる（図6）。自然の尾根の地形としてはやや不自然であるが、この地形が住宅開発により形成されたものなの

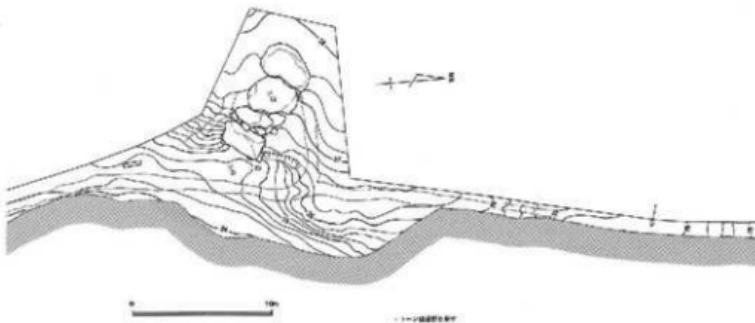


図6 墳丘周辺の地形

6 測量調査の成果

か、墳丘築造当時の尾根の地形であるのか、その判断をすることは現状では難しい。ただし、1971年当時の写真を見る限りでは上記のような傾斜は見受けられず、住宅開発によるものと考えるのが妥当なようと思われる。

石室の南側は、その形態を推察するには住宅開発が進んでいるため困難である。

石室入口のすぐ北東側は、墳丘の形態を反映している可能性がある。この部分の等高線は直線的であり、かつ等高線が石室の主軸にほぼ直交する点が注目される。また、この直線的な等高線が、石室主軸から約10mの地点で西方向へやや入り込んでいる状況が観察される。もし、この等高線が墳丘を反映しているとするならば、墳丘が方墳であった可能性も考えられよう。また、等高線が西側に入り込む地点が、墳丘を区画する何らかの遺構の反映であると仮定して、さらに石室主軸を中心に折り返して墳丘規模を求めることが許されるならば、1辺20m程度の古墳であると想定することも可能である。ただ、この地形そのものが、住宅開発に伴う造成の影響を受けている可能性があるので、この点に関しては、更に調査を重ねる必要があろう。

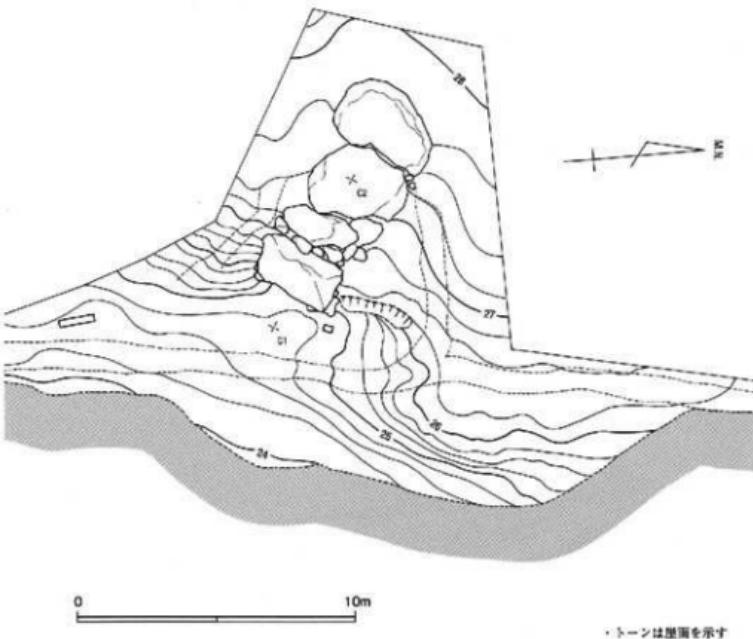


図7 墳丘測量図

漢道に着目してみると、センターが漢道入り口に向かって入り込んでいる点が確認できる。過去の文献には、明治期以降に石材が抜かれたことが記録されており（安岡1953）、墳丘築造当時は、漢道が現在より長かったと考えられる。よって、漢道の側石が取り除かれたことにより窪地が形成され、そのため、入り口に向かってセンターが入り込んでいるのだと推察される。

以上のように、朝倉古墳については周辺の住宅開発があまりにも進んでいたため、規模や形態についての断定的な記載は困難である。
（仲野）

2 石室実測の成果

石室は、N-123° 51' -E 方向に開口する横穴式石室である。土佐三大古墳の一つに数えられるにふさわしい規模を有し、使用石材もまた巨大である。規模は現状で、全長8.33m、玄室長5.23m、玄室幅2.54m（奥壁付近）・2.40m（玄門付近）、玄室高2.32m（奥壁付近）・2.10m（玄室中央付近）・2.10m（玄門付近）を測る。漢道は、長さ3.10m、漢道幅1.85m、漢道高1.35m、玄門高1.00m、玄門幅1.30mである。

平面的な特徴としては、玄室は長幅比約2:1の長方形を呈する。玄門立柱が内側にせり出す。漢道は玄室に比してやや短い感じを受ける。かつての古墳所有者から安岡源一が行った聞き取りによれば、「右側」の石の前に同一大の石がさらに1個存在したという（安岡1953）。漢道が現状よりも長く延びていた可能性がある。

床面は漢道側より流れ込んだとみられる土壤で覆れているが、側石・奥壁の下部の石材を観察すると、床面は現地表直下あるいはごく浅いところにある可能性が高い。部分的に礫が露出しているが、これらの礫が石室床面に人為的に敷かれたものか、自然の地山に含まれる礫であるのか、外部から流入してきたものは不明である。また、漢道から玄門にかけてはやや厚く土壤が堆積している。そのため玄門に敷居石があるかどうか現状では不明である。床面の状態は発掘調査に委ねる他はない。

玄室奥壁は上辺170cm・底辺234cm・高さ224cmの巨大な石材を1枚配置し、その上に天井石との隙間を埋めるように厚さ約10cmの石材を数個置く。奥壁は直立するのではなく若干内側へ傾いている。玄室側壁は、両側ともに大きな腰石を2つ配置して辺を形成することを基本とする。ただ、奥壁から漢道にむかって⁽¹⁾左の側壁は、腰石の長さが足りないので、縦長の石材を一つ配置し長さを補っている。側壁は基本的に2段で構成されるが、両側の側壁ともに漢道よりの部分は3段となっている。側壁も直立するのではなく1段目の石材から内側にやや傾けた状態で配置されている。

玄門は両側ともに立柱石を一つ立て、その上に楣石を架構する。漢道の右側壁は1段で130×220cmの石材を1つ横長に配置する。左側は2段で100×220cmの横長の石材を1つ設置した上に厚さ25~40cmの石材を2個並べる。また、漢道左側壁では、玄門立柱石と側石の間に幅

8 石室実調の成果

20cm程度の隙間が存在している。この隙間を約15cm角の縦で充填している。

漢道左側壁の外側に石材の裏込めが露出していたので観察すると（図8:d-d'）、1段目の石材の断面は上辺の長さがきわめて短いことがわかる。そのため2段目の石材との接触面積が小さく、1段目と2段目の石材の間に裏込めをかますことにより安定させている。裏込めが露出した部分のみの観察であったので掘り方や裏込めの上層の観察はできなかった。

この漢道左側一段目の石材はかなり内側に傾いているが、これは古墳築造当時からこの状態で石材を配置した可能性がある。現状で天井はほぼ水平を保っているので、漢道左側壁が現状より直立した状態だったとすると、築造当時の天井が傾いた状態に復元される上に、漢道左側壁の石材と天井石との接触面積がきわめて狭くなり、天井石を支えるには不十分な接触面積しか確保できなくなる。このことも現状の石材の傾きが築造当時のまま、あるいはそれに近いものであったことを窺わせる。

玄室と漢道の左右の側壁を比較すると、右側の側壁にくらべ左側の側壁の造りがやや雑である感が否めない。先述の通り、玄室の右側壁は2枚の腰石で基本的なプランを形成しているのに対し、左側では2枚の腰石では長さが足りず縦長の石で長さを補っている。漢道においても、左側のみ2段積みであり、築造当時から石材を大きく内側に傾けて設置していた可能性が高い。玄門立柱と漢道側壁の間に隙間があり、角縫で充填してあるのも左側壁である。右側壁を基準に石室を構築した故の現象であろうか。

天井石は現状で4石存在する。石室の外から観察すると、凹凸のある石材が使用されているが、玄室・漢道の天井は平滑である。平坦な面を内側にして天井石を配置したのであろう。漢道側から奥壁に向かって石材を重ねるように配置しているので、天井石は、漢道側より奥壁にむかって順に架構されたものと考えられる。

奥壁・両側壁の腰石・漢道側石の面はきわめて平滑である。人為的に磨いた結果である可能性もあるが、吉村康隆氏のご教示によれば自然の剥離面を利用した可能性が高いという。使用石材については次節に吉村康隆氏から玉稿をいただいた。参考にされたい。（消家）

3 石室に使用されている岩石

材質（岩石の種類） 石室は比較的平滑な表面を持つ大きな岩石により構成されており、大きな岩石の間を小さな岩石が充填されている構造となっている。大きな壁材および天材は、そのほとんどが比較的滑らかな表面をもつ岩石が用いられており、壁材の天井に近い部分の一部や充填岩石は、それほど平滑な面を持たない岩石が用いられている。石材の配置と岩石の種類を図9に示す。

石材の材質（岩石の種類）については、壁面と天井の平滑な面をもつ大きなものは、大半が石英および長石を主体とした岩石で、完晶質で鉱物粒子がほとんど認められないことから、ア

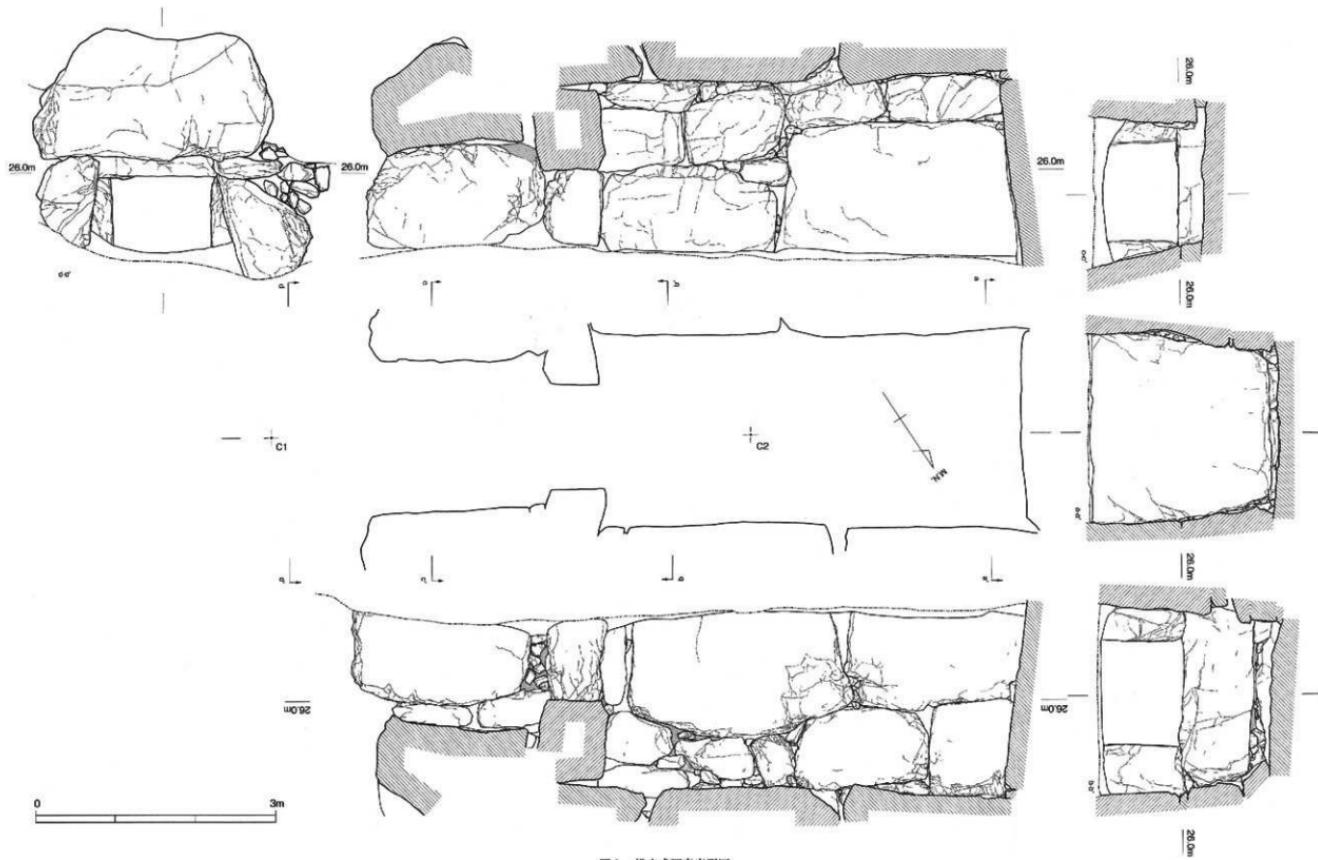


图 8 横穴式石室实测图

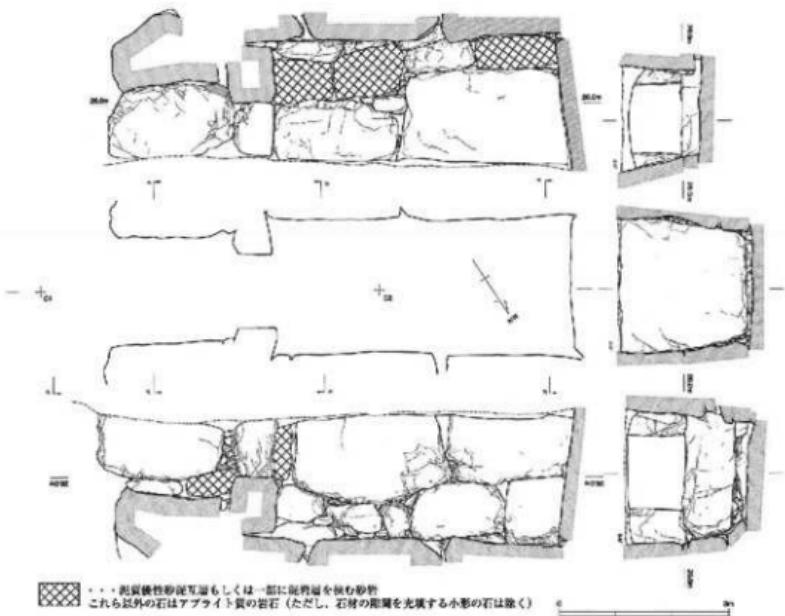


図9 石室使用石材

アブライト質な岩石もしくは砂岩が熱変成を受け再結晶したもの（再結晶質砂岩もしくは塊状砂質変成岩）である。一部にわずかながらに鉱物粒子が肉眼的に認められるところもあり、熱変成を受けた再結晶質砂岩と認定できるものもあるが、風化面からは、肉眼観察によるアブライトと熱変成を受けた再結晶質砂岩の識別は困難である。石室を構成する大型の石材は、アブライト質岩石以外に、右壁側上部に3個、左壁側下部に2個について別の材質の石材が使われておらず、泥質優勢砂泥互層（外来岩片を含むメランジュ堆積物）もしくは、一部に泥岩層を挟む砂岩である（図版7-1・2）。これら岩石は、アブライトのような平滑な面を持っていない。大きな石材を充填する小さな石材は、多くはアブライトもしくは再結晶質砂岩であるが、それ以外にも堆積岩（泥岩の基質に外来岩片を含むメランジュ堆積物）や堆積岩起源の弱変成を受けた岩石（砂泥質結晶片岩）が認められる。

石材の産地 高知県の地体構造については、北から南に向かって、三波川帯、秩父帯、四万十帯が東西性の地質構造を持って帶状に分布している（須鎌ほか1991：図10）。朝倉古墳周辺の地質については、古墳そのものは秩父帯に位置し、南側には四万十帯が分布している。四万十帯は堆積岩主体のいわゆる付加体堆積物であるが、朝倉古墳の石材にあるような強く再結晶し

図10 西南日本の地帯構造区分（原ほか1991より）¹⁰

れている岩石は、限定的な地域に産する種類のものではないため、産地の特定は困難である。石材表面 壁面や天井は比較的平滑な面で構成されており、天然の岩石表面を生かしたもののか、人為的に削岩・研磨されたものであるかは、古墳史の上で重要である。石材表面はかなり平滑で目視での判断は難しい所ではあるが、図版7-3・4を見ると、石材の左側に凸状の構造があり、凸状の周縁部（図版7-4の波線および矢印で示している部分）に風化による亀裂が認められるが、その亀裂の方向が石材表面に調和して連続している。別の石材では、石材の上部から左側に岩石の風化による割れ目が見られるが、その風化による割れ面が平滑面に連続している部分が認められる（図版7-5）。これらのことから、石材の滑らかな表面は、風化面を利用したものであると判断される。もちろん岩石を殴打して風化面に沿って割った可能性は残されているが、今回の観察では、判断が出来なかった。

(吉村)

注

- (1) 以下、石室の左右はすべて奥壁から淡道方向を向いた場合の方向を示す。
- (2) Sambagawa Terrane: 三波川帯。Northern and Southern Chichibu Terrane: 秩父帯。Kurosegawa Terrane: 黒瀬川構造帯。Simanto suite of terrane: 四万十帯。MTL: 中央構造線。

た砂岩の存在は今のところ知られていない。秩父帯の地帯構造区分については、見解の一致を見ていながら、秩父帯の中間に黒瀬川構造帯とよばれる地質体が分布しており、変成岩類や花崗岩類、蛇紋岩類、堆積岩類等多様な岩石が混在した地質体である（Yoshikura et al., 1990）。アブライトは岩脈として半普遍的に産する岩石種ではあるが、再結晶質砂岩や、砂泥質結晶片岩が共に産するのは秩父帯であり、石材は秩父帯から採取された可能性が高い。秩父帯も東西に帯状に分布する地質体であり、石材に使わ

参考文献

- 須崎和巳・岩崎正夫・鈴木義士代表編集 1991「四国地方」日本の地質8 共立出版、東京:p.267
原 郁夫・桜井康博・奥平敬元・早坂康隆・大友幸子・柳原信夫 1991「領家帯のテクトニクス」日本地質学会第98年学術大会見学旅行案内書:p.1~20.
Yoshikura, S., Hada, S. and Isozaki, Y. (1990), Kurosegawa Terrane. In Ichikawa, K. et al., eds., Pre-Cretaceous Terranes of Japan. Publication of IGCP Project 224, Osaka, 185~201.

第Ⅲ章 まとめ

本古墳が持つ意義と問題を示してまとめにしたい。

墳丘 墳丘測量を実施したが、住宅開発が進み墳丘の大部分は擁壁下にあることが判明した。墳丘の大部分は破壊もしくは埋没していると考えられ、墳形と規模は明らかにできなかった。しかし、石室北東側には、墳形を反映する可能性を持つ箇所がある。墳形と墳丘規模を解明するわずかな手がかりと可能性がそこには残されている。今後、発掘調査を必要とする部分である。

石室 土佐三大古墳の一つに数えられるにふさわしい石室規模と巨大な石材が用いられている。この石室をさらに特徴づけるのはその構造である。玄門立柱が1石で構成され、内側に顯著にせり出す。楣石も架構される。これは山崎信二の分類ではAa型に近い（山崎2003）。土佐において玄門立柱石が内側にせり出す古墳は高岡原古墳群などに例があるとされるが、そのせり出し方は明瞭でないものが多い。また、土佐では、山崎分類Bb型とBc型に分類される畿内型あるいは畿内系と呼ばれる石室が多いのである。朝倉古墳の石室は土佐では他に例がない石室形態であると言えよう。

朝倉古墳の持つ意味と首長系譜 朝倉古墳が特異な点は石室だけにあるのではない。本書第I章にも示したように、高知平野において古墳は主として東半の南国市・土佐山田町を中心とした地域に展開する。高知平野の西半はそれに比べ古墳が少ない。朝倉古墳はその高知平野の西端に位置するのだ。

朝倉古墳を建築した集団は、高知平野東半の古墳を造営した主体と異なることは間違いない。朝倉古墳の年代については現存する出土遺物がないので、細かな年代を示すことは難しい。しかし、巨石を用いる構造から考えると7世紀を遡ることはないだろう。朝倉古墳築造以前には大規模な古墳は周囲に存在しないので、その出現はきわめて唐突な感がある。

高知平野東半にも複数の首長系譜があると考えられるが、これらの多くは畿内系石室を中心である。これに対抗するように高知平野西端に系統の異なる大型古墳が突如として築かれることの意味は大きい。朝倉古墳の出現は、土佐における諸勢力の関係にダイナミックな変動があったことを窺わせる。

この問題を解決するには、朝倉古墳に関する情報も不足している上、土佐全体の古墳に関する調査もしていく必要がある。継続して調査と研究を進めていきたいと考える。（清家）

参考文献

山崎信二 2003『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京

図 版



(1) 朝倉古墳の立地



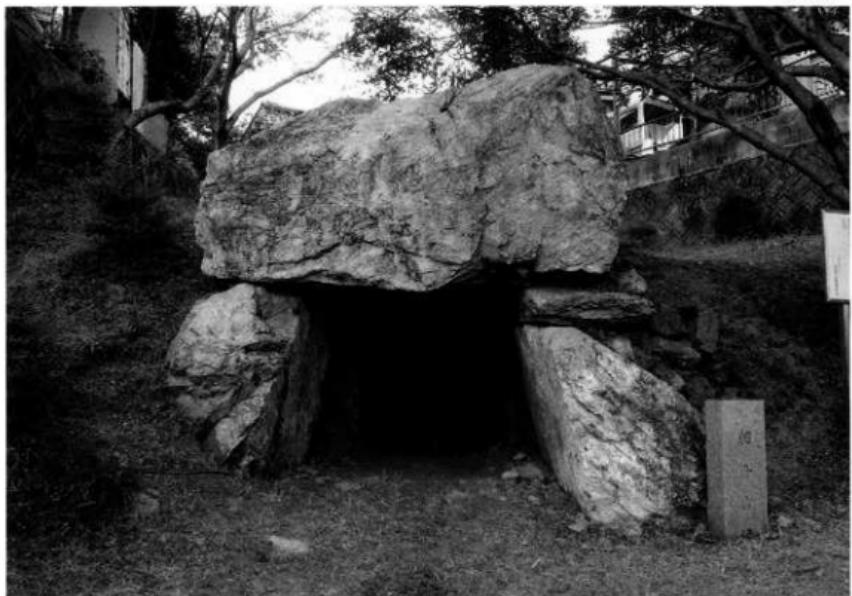
(2) 朝倉古墳遠景



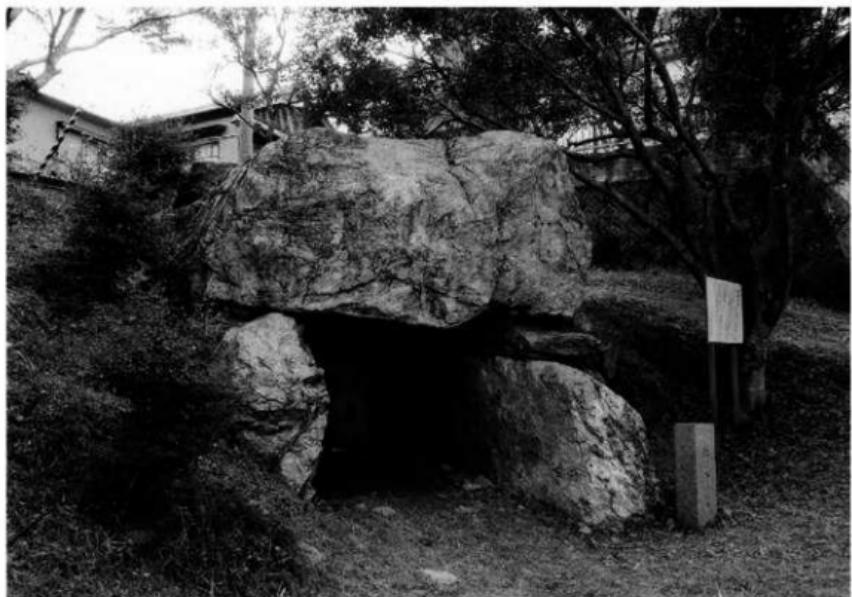
(1) 1971年当時の朝倉古墳（高知県教育委員会文化財課提供）



(2) 開発前の朝倉古墳（高知県教育委員会文化財課提供）



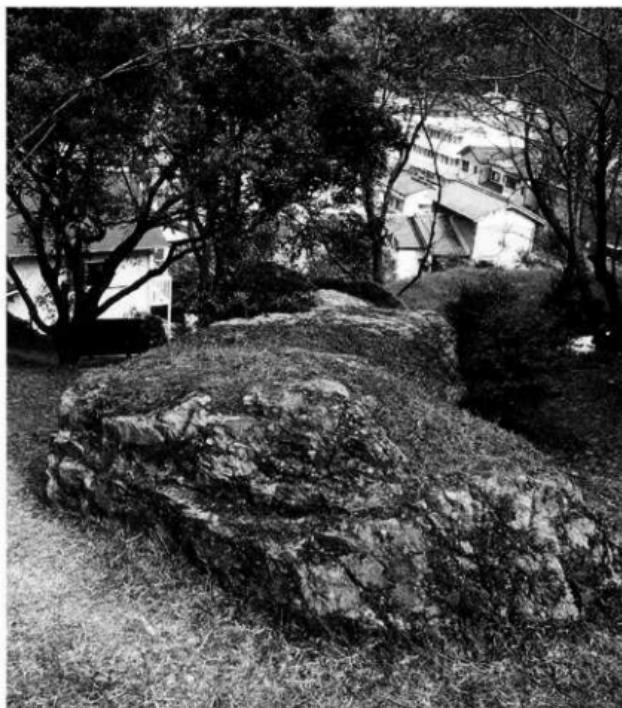
(1) 横穴式石室入口 1



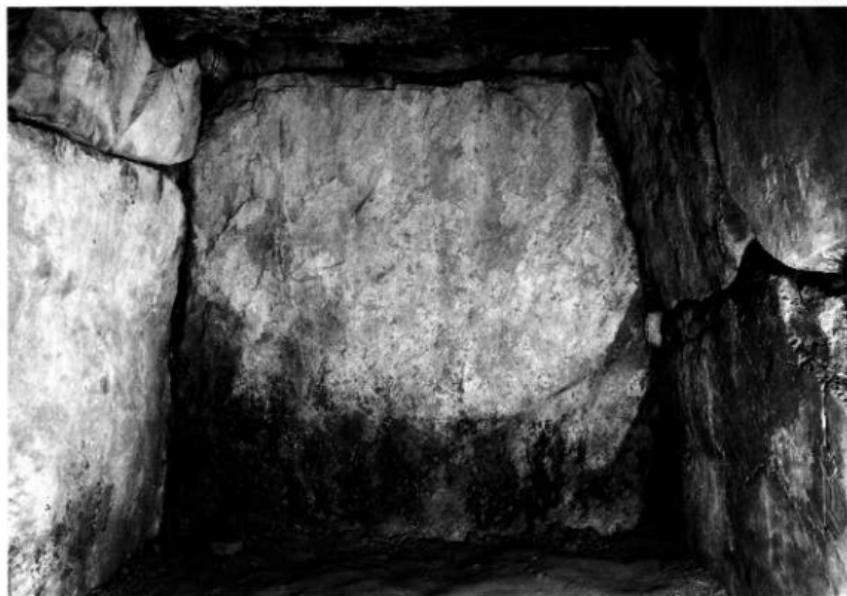
(2) 横穴式石室入口 2



(1) 天井石露出状況 1 (北から)



(2) 天井石露出状況 2 (西から)



(1) 横穴式石室奥壁



(2) 横穴式石室玄門（玄室から）



(1) 横穴式石室玄門（羨道から）



(2) 羨道右側壁



(3) 羨道左側壁



(4) 玄室左側壁



(5) 玄室右側壁



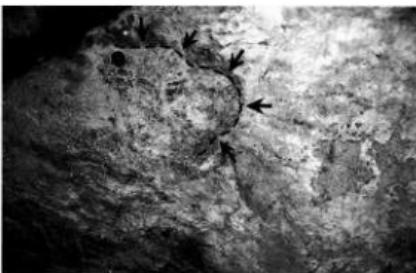
(1) 右側壁奥に見られる砂岩
(一部に泥岩層を挟む)



(2) 右側壁面上部中央に見られる泥質優性砂泥互層
(外来岩片を含むメランジュ堆積物)



(3) 平滑な石材に見られる凸状の構造と風化面1



(4) 平滑な石材に見られる凸状の構造と風化面2
石材の材質はアブライト質で、写真下の波線および矢印で示した部分に風化面が見られる。風化面と石材の平滑な面は連続しており、平滑面は凸部内に伸びているのが確認できる。



(5) 平滑な面を持つ石材に見られる風化面
矢印の割れ目の部分が風化面で、石材の平滑面の延長上に風化面があり、石材内部に伸びている。

【報告書抄録】

ふりがな	あさくらこふんそくりょうちょううきはうこくしょ				
書名	朝倉古墳測量調査報告書				
副書名					
シリーズ名					
シリーズ番号					
編著者名	高知大学人文学部考古学研究室（編著：清家 章）				
発行機関	高知大学人文学部考古学研究室				
所在地	高知市曙町2-5-1				
所取遺跡名	所在地				コード
朝倉古墳	高知市朝倉字宮の奥				市町村遺跡番号
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
33° 33' 03"	133° 28' 40"	040805~040815	0 m ²		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝倉古墳	古墳	古墳時代	古墳		

朝倉古墳測量調査報告書

2005年3月発行

編集 高知大学人文学部考古学研究室
 発行 〒780-8520 高知市曙町2-5-1

印刷 伯蔵印刷所